

男女共同参画推進センター 機関誌

京からあすへ Vol.4

2024年3月29日発行

発行 京都大学男女共同参画推進センター
〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
TEL 075-753-2437
E-mail w-shien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
URL <https://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>

制作協力 京都通信社
デザイン 中曽根デザイン



KYOTO UNIVERSITY

京からあすへ

京大からひろがる
色とりどりの未来

2024
March
Vol. 4

京都大学男女共同参画推進センター

02 京都大学キッズコミュニティ オープン記念座談会 「自分らしさ」を見つけて挑む 答えのない世界

08 未来に贈るきらめくバトン 研究者インタビュー

仲 ゆかり(防災研究所)
田口かおり(人間・環境学研究科)
時任美乃理(農学研究科)

14 みちみちて一歩 卒業生インタビュー

清水真希
佐々木亜沙美
佐々木恵梨

20 密着！京大生——4回生編

22 わたしの味方、わたしの見方

京都大学
キッズコミュニティ
オープン記念
座談会

「自分らしさ」を
見つけて挑む
答えのない世界



京都大学に2023年12月、学童保育所 京都大学キッズコミュニティ(KuSuKu)がオープン。京大の教職員・学生の育児支援の充実と次世代を担う子どもたちの育成を目的に生まれたこの施設には、子どもたちの遊びと学びを誘発するさまざまな工夫が凝らされている。設計を担当したのは、京大工学部建築学科出身の大西麻貴さんと百田有希さん(一級建築士事務所 o+h)。楽しげな子どもたちの声が響く開所直後のKuSuKuで、工学部建築学科の学生たちとともに、建築設計の楽しさ・むずかしさ、不安との向き合い方を率直に語りあった

参加者

大西麻貴(建築家、建築学科卒業生)
武田麻由(工学部建築学科2回生)
宮坂杏奈(工学部建築学科2回生)
白井李佳(工学部建築学科2回生)
長竹璃子(工学部建築学科2回生)

大西●みなさんとは京都大学の設計演習で
なんどかお会いしましたね。私は京大の工
学部建築学科を卒業後、東京大学大学院に
進学して、博士課程の在籍中に建築士事務
所o+hをはじめました。共同主宰の百田有
希さんは京大時代の同級生で夫です。
長竹●大学院在籍中の事務所設立は、学生
のころから考えておられたのですか。
大西●学生時代は漠然と、どこかの建築設

計事務所に就職すると思っていました。大
学院のときに設計の仕事をいくつか担当す
ることになりましたが、建築は数年がかりの
仕事。修了後もつづくプロジェクトですか
ら、そのまま事務所を設立したんです。
白井●そのときから百田さんとペアで設計
していたのですか。
大西●そうです。最初は4回生で参加したア
イディアコンペかな。私はどちらかというと



上・右下/設計を担当したシェルター
インクルーシブプレイス コパルの外
観と内観
左中/共同主宰の百田有希さんと(撮
影・Yurika Kono)
下/学生時代の卒業設計



大西麻貴さん

おおにし・まき
1983年、愛知県に生まれる。2006年
に京都大学卒業。2008年に東京大学
大学院修士課程修了。同年から「大
西麻貴・百田有希/o+h」を共同主
宰。2022年から横浜国立大学大学院
Y-GSA教授。おもな作品に「二重螺旋
の家」、「シェルターインクルーシブ
プレイス コパル」など。



一人で設計するのが好きなタイプでしたが、百田くんは仲間を巻きこんでゆくタイプ。一緒に作業していると、どんどん友人が増えるのが新鮮で楽しかったのを覚えています。

10年後、 なにがどう花開くかは未知数

白井● 将来、個人事務所を立ち上げたいんです。でもまだ、設立までの道のりは想像で



武田麻由さん
工学部建築学科2回生



三角形の各辺がつぎの三角形につながっており、進む道を選択することで多様な空間体験を得られる図書館を設計

きていなくて……。

大西● 私は建築図面を書くことが苦手だったし、学生時代は褒められることも少なかった。建築家としてやってゆく自信はなかったのですが、持久戦のように忍耐強くつづけていると道が開いてきたんです。

私は就職せずにいきなり事務所を設立しましたが、百田くんは伊東豊雄建築設計事務所に5年間勤めていました。学生時代は同じ課題をして、同じような価値観で育ってきたのに、5年後は別人のようになって帰ってきた(笑)。伊東さんは京大の非常勤講師もされていて、私も多大な影響を受けましたが、その中途半端な師弟関係とは違う、深く伊東さんの考え方に浸かって経験を詰んだ百田くんをうらやましく感じます。でも、ゴールへの道すじは一つではないので、思いつくれば絶対に実現しますよ。

武田● 私は将来のことはまったく……。いまはひたすら、設計する楽しさが原動力です。**大西●** 建築学科の講評会に参加して武田さんの作品を見ましたが、とても印象に残っているんです。いまは将来を考えずに、ひたすら力を伸ばすことも一つ。将来を考えると、どうしても息苦しくなることがあるから。なんとかなる、と思うのも大切です。

武田● 好きなことをつづければ将来も見えてきますか。

大西● 見えてくると思う。いまの経験が10年後にどう花開くかはわからない。大学時代に「なんの役にたつのだろう?」と思いながら勉強していたことに10年後ハッとさせられたり、昔の仲間とコラボレーションの機会があったり。「種まき」のような経験が数十年後の自分とつながることがあるんです。

武田● 先生方からいただいた意見がしっくりこないというか、「つまりどういうこと?」と思うことがあります。いつかはそれもわかるときがくるのかな。

大西● 私もとても頑固な学生で、作品へのコメントに「なぜそんなことを言われるのかしら」と思っていました(笑)。いまはむしろ、「いいアイデアをありがとうございます!」と受け取れるんだけど……。いっぽうで先生からのコメントは受け止められなくても、なぜか友だちに言われるとグサッと心に刺さったりね(笑)。

白井● ほかの学生の知識の豊富さに劣等感を覚えたり、ほかの学生の作品がよりよく見えたり……。こんな経験は大西さんにもありますか。

大西● もちろん。でも、建築の解は一つじゃない。解が一つに絞られる試験勉強とは真逆のせいか、「こんなにがんばっているのになぜ評価されないんだろう」と悩む同級生は多かった気がします。建築は人によって良



白井李佳さん
工学部建築学科2回生

し悪しの価値観が違うものだし、見る人が違えば言うことも違う。最後は自分で決めるしかない気がついたのは、私にとってもターニングポイントでした。

「自分らしさ」の軸の見つけ方

宮坂● 建築家の方の発言を読むと、興味・関心を幼少期や高校時代に見つけている方が多いんです。大西さんは自分の関心をどう発見されたのですか。

大西● インタビューで興味の原点や幼少期の経験を聞かれがちなので、返答を考えるうちにしだいと、現在と幼少期とのつながりが見えてくるのかもしれません。私は廊下のように長くつづく空間に興味があるのですが、興味を自覚したときに「これは幼少期のあの体験が……」という意識はなくて、もっと直感的なものでした。宮坂さんはどうしてそれが気になったの?

宮坂● 「これもいいし、あれもいい」とあちこち手を伸ばしてしまっ、進むべき方向を



2回生の図書館課題で、ひとつの小さなまちのような図書館を設計

どう決めればいいのか迷っているんです。どこ一つの力を伸ばすにも、「これだ」という根拠や意志はどう見つけなければならないだろうと……。

大西● 大学時代、他人の作品や案を見て、「これはいい・わるい」とすぐに判断できる同級生がいました。当時の私は、彼みたいに「いい・わるい」がわからなくて、「どれにもいい部分があってよくわからないな」と。でも、「私もそんなふうには判断できる人になってみたい」と憧れて、最初はむりやりにでも、友人の案を勝手に批評して、「かっこいい・かっこわるい」、「おもしろい・おもしろくない」を決めることにしてみたんです。それを意識的に積み重ねていると、いつの間にか自分の「好き・嫌い」の基準が育ってきた。

宮坂● そういうときに私は考えこんでしまうんですが、私もやってみます。

回答のない建築の世界に 飛び込んだ理由

大西● みなさんはなぜ建築に興味をもったのですか?

武田● 幼少期から絵を描くことやデザインが好きで、なんとなく建築学科は楽しそうだと選びました。模型をつくることも知らずに進学しましたが、いまはとても楽しいです。**宮坂●** 私も絵を描くことが好きでした。でも、絵がとてもうまい友人がいて、その実力の差に打ちのめされてしまった。美術大学への進学を諦めて勉強をがんばることにしたんです。いざ建築学科に入ると、建築も芸術と同じで回答がない。いまも悩みはつきません。**大西●** 建築家ごとにもつ武器は違います。均整なプロポーションを重視する人、言葉を



宮坂杏奈さん
工学部建築学科2回生



正三角形をらせん状に連ねた構造体を制作

つかって物語を編みながら設計する人、自分の手を動かして設計することが得意な人……。いろいろな切り口で戦えるから、自分なりの刀を磨くのがいちばん。

建築を志そうと思ったときに、いろいろな人にアドバイスをもらったのですが、そのときに出会った建築を仕事にする人から「建築はたいへん」、「才能がないとね」とか、「あなたにはむずかしいかもね」なんて言われたこともありました。そういうネガティブなコメ

ントはいまふり返ると嫌だったなあと。私が建築家になって心から思うのは、建築はすばらしい仕事だということ。そして、自分の能力を信じれば、いろいろな道が開かれている職業だということです。

白井 ● 高3で建築学科への進学を決めました。決め手はものづくりが好きだということ。それから、私が過ごしてきた幼稚園、小学校、中学校の校舎です。著名な建築家が携わった建築ではないのですが、各教室の



長竹璃子さん
工学部建築学科2回生



御池通沿いの敷地を選び、地域の人や学生が気軽に表現の場をもてるような野外舞台を設計

扉がなかったり、校舎が一つの回廊でつながっていたり、自由に開かれた環境で、私の人柄にも影響していると思うんです。私もそういう建築をつくりたいと。

長竹 ● ものづくりは好きだから理系選択でしたが、高校の理系科目のようなことを大学で学ぶのはあまりしっくりこなくて……。建築なら歴史や人文社会系の分野との関わりも強く、「理系っぽくない理系」だと思ったんです。それから、絵を描くのが上手な姉がいて、芸術方面は姉ばかりが褒められた。それが悔しくて(笑)。だからといって芸術分野の道を諦めるのは嫌だという反骨精神がありました。

大西 ● 反骨精神はエネルギーになるよね。はじめて社会に出て批評を受けたとき、けっこう厳しいことを言われたんです。いま思えば当たり前の指摘なんだけど、ショックを受けつつ、「見返してやるぞ」とも思った。

私が憧れる建築家の一人が妹島和世さん。あるとき、妹島さんの初期の建築を巡る機会があって、訪れるうちに「いまの私と同じ年齢でもうこの設計を」とだんだん落ちこんできました。「私にはできない」と思って。そこで妹島さんに「敵わないと思って落ちこむことはありますか」とお聞きしたら、「私にはまだやるがあると思って、むしろエネルギーが湧いてくる」とおっしゃったんです。気負いなく、さらっと自然体でそう話す姿がカッコよくて、私もそう考えるようにしよう、と心がけているんです。



座談会の実施前には大西さんの案内で、「KuSuKu」を見学。設計者の大西さんから語られるこだわりのポイントに興味津々

宮坂 ● 大西さんは、自分の感性でまっすぐに歩んでこられた方なのかなと勝手に思っていたのですが、むしろたくさんの方の影響を受けてこられたのですね。

大西 ● そうですね。とくに伊東豊雄さんと、大学で教えていただいた竹山聖先生。竹山先生はどこにも勤めずに独立された方で、大学時代にその背中を見ていたことが、進路選択に大きく影響していると思います。建築設計するのってこんなに楽しいことなんだと、いいアイデアが思いついて鼻歌を歌いながらスケッチをされている竹山先生を見て思ったんです。「建築家のそばにいたのがいちばん建築家になれる」とよく言われますが、こうした建築家の方がたの生きざまにふれて、「あ、こうして生きていけばいいのか」、「こういう生き方もあるんだ」と。その背中に導かれて、ここまでやってこられたのかもしれない。

実施日：2023年12月25日(月)

京都大学学童保育所 京都大学キッズコミュニティ KuSuKu

京都大学の教職員・学生支援の一環として、育児支援を充実すべく開設されたKuSuKu。館内を回遊するように動き回れる自由さと、一人でもゆっくりと過ごせる「たまり」のような小さな居場所が両立した環境で、京都大学の研究リソースを活用した「京大ならではの」教育プログラムが展開される。大西さんと百田さんが担当した設計には、施設を利用する子どもたちの探究心と好奇心を育む仕掛けが満載。

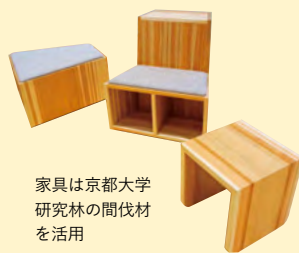


ボール入れやボルダリング遊びなどができる「ゆうぎ室」

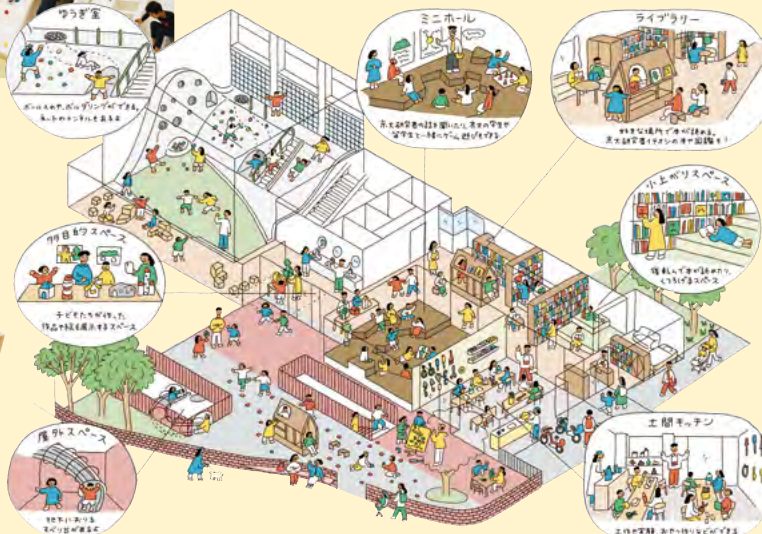
京大の研究者の話を聞いたり、さまざまな場面に利用されるミニホール



好きな場所で本が読めるライブラリースペース



家具は京都大学研究林の間伐材を活用



寝転んだり、くつろいだりできる小上がりスペース



工作にもつかえる土間キッチン

KuSuKuを訪ねて……



何気ない凸凹などに子どもが集まっていて、簡単な仕掛けでも配置場所などを細かく検討すればこんなに素敵な空間が生まれるんだと感動しました。

武田さん

中を進むにつれ、入り口では想像できなかった空間が左右に立ち現れてきました。日のあたる手洗い場が好きです。

宮坂さん

建築物の設計だけでなく、子どもの想像力をかき立てる家具の設計にまで工夫が凝らされていて感動しました。

白井さん

子どもたちの過ごし方や遊び方を規定せず自由なふるまいの余地を残した設計が印象的で、ワクワクしました。

長竹さん

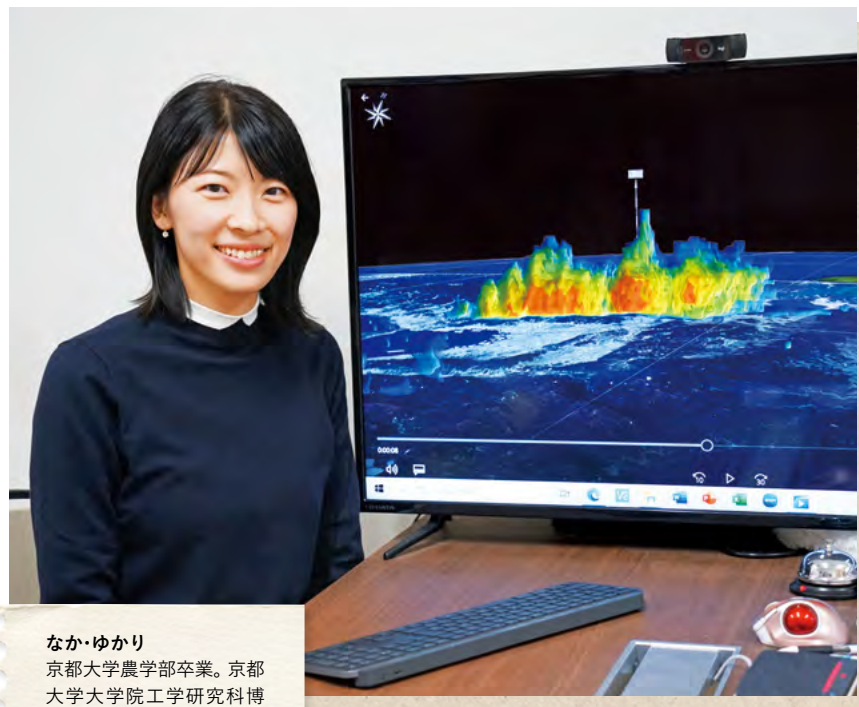


京都大学大学文書館の建物の一部を利用して誕生したKuSuKu

予測不能な集中豪雨のメカニズムに迫る。 次世代に、安心・安全な世界を届けたい

仲 ゆかり

防災研究所 助教

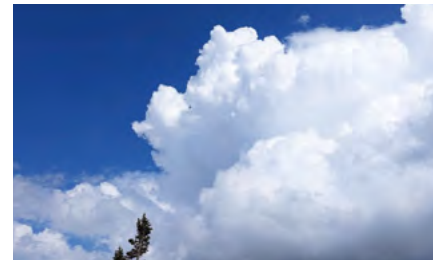


なか・ゆかり

京都大学農学部卒業。京都大学大学院工学研究科博士後期課程を修了。2022年から現職。

高校時代の私には、これといった夢や目標はありませんでした。「環境問題」というぼんやりとしたテーマを掲げて京大農学部に進学しましたが、そんな姿勢ですから授業の内容にどこかのめり込めない自分がいたのです。「いちど選んだ道は変えられない」と思い込み、悩んでばかりの大学1、2回生を過ごしました。

入学した学科で扱う環境問題は、森林資源や食料問題など、社会や経済も絡んだ資源面が中心です。いっぽうで環境問題には、温暖化のメカニズムの解明など、地球全体の動きを見る地球科学的な側面もある。私の興味はこの側面だったのだと、ようやく気がついたのが3回生のころ。周囲が就職活動に励むのを横目に、大学院進学を視野に入れて研究室探しをはじめました。卒業後は就職するつもりでしたが、迷いばかりの大学生活で、「これを身につけた!」と言えるものがないことが心残りだったのです。



2023年、学会ではじめてアメリカのコロラドに行きました。アメリカで発生する雲は、日本で発生する雲とは違っておもしろい!



意を決して、大学院での方向転換

地球科学といっても、研究対象は大地、火山、海洋、鉱物など、幅広いです。なかでも私は、大気や気象などの空の動きに惹かれるものを感じていました。理学部の授業にもぐり込んだり、「京都大学／気象／大気」の用語で検索して出てきた研究室に見学を申し込んだり、自分の目と耳と足で、ぴったりくる居場所を模索しました。

そうして出会ったのが、現在も助教として所属する水文気象災害研究分野です。研究対象にしたのは梅雨前線と線状降水帯。線状降水帯は列をなした積乱雲が数時間にわたってほぼ同じ場所に雨域をつくり、強い雨を降らす現象で、梅雨期によく発生します。

発生には水蒸気の量や風量など、偶然性の高い複数の要素が絡むので、メカニズムの全貌は未解明。ゆえに予測が難しく、各地で想定外の豪雨や災害をもたらしています。

局所的で、観測では捉えづらいこの現象に、データ解析やシミュレーションを駆使して迫ります。

大学院進学を選んだ時点で、研究職や専門職に進む覚悟を決めていましたが、背中を押した決め手は研究に夢中になれる自分を発見したこと。データの解析から検討、さらにはグラフの書き方一つとっても、すべてが新鮮で楽しかったのです。「私はこれがしたかったんだ」と、それまでの迷いを忘れて没頭しました。

ぶれない芯さえあれば、まわり道も恐くない

防災研究所には、河川や海岸、火山、避難活動などの多様な専門家が、「防災」の名のもとに集っています。研究室の上司からよく言われたのは、「雨だけを見るのではいけない。そこで暮らす人たちや社会の幸せを考えなさい」ということ。理論研究のさきに

ある、現実を生きる人びとや社会を考えることは私たちの研究に不可欠です。平均気温が上昇し、線状降水帯の発生頻度が増えれば、暮らしにさまざまな影響がでるはず。発生のメカニズムを解明し、集中豪雨の発生頻度の変化を予測することで、私たちはこれからどのような社会をつくるのか、考えるための材料を提供したいのです。

研究者としてのこれからの選択を考えて悩むことがありますし、将来は想像もつきません。でも、一つ確かなのは、次の世代にべんりで安心・安全な環境をつなぎたいという思い。まわり道をしたとしても、この芯さえぶれずにもっていれば、納得のゆく道を歩めるはずだと思っています。

若いときは先が見えない不安から、いちどの判断が人生を決めてしまうと思いがち。でも、選択したら終わりではありません。失敗も遠回りも恐れずに、いま信じているベストな選択をしてください。



休日は旅行に行くのが大好きです。最近はずっと行きたかった宮崎県の高千穂に行ってきました

イタリアで磨いた絵画修復の技術。 修復士の視点で芸術作品の核を見抜く

田口かおり

人間・環境学研究科 准教授



たぐち・かおり

フィレンツェ国際芸術大学絵画修復科を修了後、フィレンツェ市内の修復工房で勤務。京都大学人間・環境学研究科博士後期課程修了。東北芸術工科大学 研究員、東海大学教養学部芸術学科准教授などをへて、2023年から現職。



京都大学総合博物館の企画展で展示する作品を点検中

15歳のころ、旅行先のイタリアではじめて目にしたミラノの大聖堂と、フィレンツェでめぐり会ったフラ・アンジェリコの壁画が道を決めました。大聖堂のあまりの大きさと複雑さ、壁面の人物たちがまとう衣服の色鮮やかさに衝撃を受けたのです。「どうしてこんなに美しいまに事物がのこるのだろう」。文化財の保存に関わる仕事を探すなかで、絵画修復士という職業にたどりつきました。

そうと決まれば、まずはイタリアに行かなければ、イタリア留学ができる近隣の大学を探して進学しました。1回生と3回生のときに留学して、修復工房を訪ね歩き、情報を集めてまわったのです。

正解のない絵画修復に挑む

日本の大学を卒業して、フィレンツェ国際芸術大学に入学。ゲッサンや美術史、材料技法学や修復理論など、必要な技術と知識を学びました。苦労したのは化学。作品の物質的な構造や性質を知り、絵画表面の洗浄に



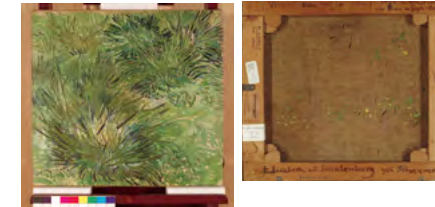
イタリアでの授業中

使う薬剤の調合などに必要な知識を身につける授業です。修復士になるためには必須の知識ですが、化学はほぼ未履修。おまけにイタリアの試験は口頭形式が多いので、丸暗記では乗り切れない。苦手意識をふり払って、独学で高校の教科書から学び直しました。

資格取得後は、絵画修復士としてフィレンツェ市内の修復工房で働く機会を得ました。貴重な経験を重ねるいっぽうで、壁となったのが外国人労働者として働くさいに必要な各種許可書や給与をめぐる問題です。アルバイトをしながら修復に携わるなかで、経済的・身体的にも疲れがたまり、絵画と向きあう時間が削られてゆきました。

私が胸に刻んでいたのは、ある美術史家が述べた「修復は批評である」という言葉。たとえば、作品によっては制作当時の状態をめざして復元的に修復するよりも、経年劣化こそが重要な意味をもつことも。作品にとってなにが重要かを考えて、ときには依頼主の意向を汲み取りながら最善の方法を模索します。修復とは、異なる作品をひとつひとつ理解し、ふさわしい道を探ること。多忙な

フィンセント・ファン・ゴッホ《草むら》(1889)
油彩／カンヴァス、45.1 x 48.8 cm、ポーラ美術館所蔵



思い出深い作品は、ポーラ美術館所蔵のゴッホ作《草むら》。作品の裏に布や紙を貼り付けて補強する「裏打ち」がされておらず、裏面には絵具が点々とついている。絵具が乾く前にほかの絵画の上に重ねられたと推測できる。「作品の『裏』は、当時の作品の保存環境や情報を伝える貴重な資料。これが鑑賞できるよう、展覧会では透明なガラスケースの中に作品が展示されました」。

日々のなかで、ここが疎かになることに葛藤を感じはじめていました。

ここでいちど立ち止まり、各作品や保存修復という学問そのものと時間をかけて向きあいたい。美術史家であり、修復の射程についても検討をつづけておられた岡田温司先生と出会い、京都大学に飛び込みました。だれもがそれぞれの研究テーマを熱心に追究する人間・環境学研究科の空気に助けられて、私もぞんぶんに関心を追求できました。

保存・修復の実技と思想の結び目に

いまは、研究や修復実践のかたわら、コンサーベーター (Exhibition Conservator) として展覧会での仕事にも携わっています。コンサーベーターの仕事は、展覧会のために国内外から借用した作品を点検して、部分的に修復をしたり展示環境を再検討したりなど、所蔵者とも話しあいながら返却までの状態管理をする、というもの。現場にはもどれない覚悟での進学でしたが、直接に作品に触れるとやはり大きな喜びを感じます。

京都大学総合博物館で企画展を開く機会

もありました。京都で活躍した造形作家、井田照一の作品《Tantra》との出会いがきっかけです。自身の爪や、その日の食事などを画材につかい、病に冒された日々を記録した、いわば日記のような作品群ですが、絵具だけでなく、独特の臭気がある。視覚だけではなく嗅覚も呼びこむような作品について、どう展示し後世にのこすのか、私のなかに新たな課題が芽生えました。保存修復の分野でおこなう調査を通じて発見した作品の姿や情報を展覧会などで届ける活動は、これからつづけていきたいです。

私がそうだったように、現代の人たちは日々の生活や仕事が忙しすぎて、焦りゆえに、ぼんやりする時間を恐れてしまうことがあるように思います。私はいったん仕事から離れて、作品を無心で眺める時間を増やした京都で、多くの新しいひらめきと出会いました。なにもしない時間をもつこと、流れに身をまかせること、そしてオープンな心で次の展開を待つことが、ときとして人生に大きな贈りものをもたらしてくれると信じています。

ふたつとない地域に、ふたつとない地域計画を。 地道なやりとりの積み重ねが描く地域の未来

時任美乃理

農学研究科 森林科学専攻 助教



ときとう・みのり

京都大学大学院地球環境学舎博士後期課程 修了。京都大学学際融合教育研究推進センター 特定研究員、同大学大学院地球環境学舎 特定助教などをへて、2023年から現職。

大学3回生のとき、指導教員に連れられて訪ねたボルネオ島がすべてのはじまりでした。当時の私の将来の夢は、自然系雑誌の編集者。でも、熱帯の山奥での生活をはじめて体験して、ものを書くことよりもまず、文字になる前のみずみずしい情報にいちはやく触れ、経験したい！という欲張りな気持ちが芽生えたのです。

日本語を忘れるほど、 地域に溶けこんで調査した半年間

ボルネオ島でいちばん印象的だったのは、はじめて見る動植物や大自然の景色……ではなく、現地に生きる人びとの暮らしでした。人と自然が絶妙に応答しあい成立している生態系の姿を、はじめて目の当たりにしたのです。環境問題は、人を排除し自然だけを囲い込んで保護すればすむ問題ではなく、人と自然がどう関わりあっていくかを真剣に考えなければ、なにも解決しない——教科

書では学べないこの現実と直面し、人と自然の関わりをより学際的な視点から考えたいと、京都大学地球環境学舎に進学しました。

専門に選んだ地域計画学は、地域に暮らす人々、文化、歴史、自然など、そこにある地域資源を最大限にいかし、持続可能な地域計画を考えていく学問です。地域に適した計画を一から考えるには、まずはその地域をとことん知ることからはじまります。

GISなどを用いて量的データの分析もありますが、地域のことはその地で暮らす住民たちに聞くのがいちばん。大学院1年めには約半年間、タイ北部の少数民族の村に住み込み調査をしました。言語もわからないまま飛



ベトナムで調査した熱帯早成樹林業。伐採後に運び出される木材



び込みましたが、現地のを食べ、住民にまざって山仕事や農作業をし、地域に溶けこむことを第一に心掛けていますと、帰国するころには日本語が思いだせなくなるほど(笑)。でも、そうしてはじめて、地域の方が心を開いて、思いをこぼす瞬間に出会えるのです。

地道なやりとりでこそ育まれる 地域住民との信頼関係

大学院2年めからは、ベトナム中部の山岳地域での調査をはじめました。かつては伝統的な焼畑農業を営む村でしたが、市場経済化が進み、山の斜面に熱帯早成樹プランテーションが広がります。土地のつかい方が変わると、暮らしや生態系も変化します。いまどんな状態にあり、この先にどんな影響を与えるのか。一軒一軒まわって土地利用や生業の実態を精査し、住民と対話しながら地域のあり方を模索しました。

私たちの研究には、型にはまったアプローチもマニュアルになる教科書もありません。地域ごとに抱える課題や有する資源は違うので、ある地域では成功した方法も、また別の地域では機能しないことなど日常茶飯事。正解のなさに悩まされることもあるのですが、だからこそ広がる可能性と潜在力が私を魅了してやみません。

ここ数年は、出産と育児で長期出張がむず



愛媛県の山間部に広がる棚田で農作業。週末の調査にはいつも息子を連れていきます

かしくなり、日本の農村で調査をすることが増えました。過疎高齢化が喫緊の課題である愛媛県の山間部で、地元の高校生とプロジェクトを進めています。当初は「じきにだれもいなくなるから」と諦めの空気に包まれていた限界集落の人びとが、若者との協働作業をつづけていくなかでふと「地域をこうしたい」と前向きな気持ちをこぼしてくださったときには心が震えます。止まった歯車が動きだしたような活気に励まされて、いまま月1回、愛媛に通って変化を見つめています。

一つとして同じ地域がない。だからむずかしい。でも楽しい。つねに柔軟な視点が求められるこの分野において、私は京大で学べたことがほんとうによかったと心底思っています。なぜならここには専門分野や考え方の違う人たちがごまんといて、偶然の出会いすら多種多様で刺激的だから。型にとらわれない自由な学風がいつも背中を押してくれるのです。まずは飛び込むこと。それが代えがたい経験を連れてきてくれるかもしれません。

タイ北部の農村で。作業の合間に村のみんなと休憩

京大で追求した「好き」の気持ち。 患者さんの「食べたい」の思いに応えたい

清水真希さん

京都大学医学部附属病院 看護部

兵庫県 兵庫県立長田高等学校出身
京都大学医学部人間健康科学科 卒業



小学生のころに祖母が消化器系のがんを患いました。食べることが大好きだった祖母の食事ができなくなった姿を見るのは、とてもつらく、「なんとかしたい」と強く感じました。幼少期は病気がちで、もともと医師や栄養士、薬剤師などの仕事にも漠然と興味があったのです。

私も食べることが大好きで、人びとの暮らし、ひいては人びとの人生に強い関心がありました。そうした興味と、「人と話をすることが好き」という私の性質とが交わる場所にあったのが「看護師」という職業でした。

授業をとおしてふり返った 原点の思い

看護学を学べる大学は多いのですが、京都大学を選んだ決め手はオープンキャンパスで感じた雰囲気。想像していたお堅い雰囲気とは180度違う、フランクな教員や学生の方がたとえ接して、「ここで視野を広げたい」と感じたのです。興味のある一般教養の授



学部時代はアーチェリー部に所属。医学部のキャンパスは場所が離れているので、部活などでなければ、なかなか他学部生とふれあう機会がありません。部活のおかげで、いろいろな興味をもつ友人と知りあえたのは貴重でした

業が揃っており、選択の自由度が高いのも魅力でした。

入学時は、高校で山岳部に入っていたこともあり、山岳救助やドクターヘリなどの救急看護に興味がありました。しかし、のちにゼミに所属することになる白井由紀先生の授業が、いまにつながる指針となりました。がんなどの影響で固形物を食べられず、食欲不振になる患者さんにも食事を楽しんでもらえるように関わっておられるホスピスの看護師さんや栄養士さんの取り組みのお話を聞いたのです。そこで「患者さんが感じるつらさに寄り添いたい、なんとかしたい」という原点を思い出したのです。

卒業研究では、祖母のような終末期がん患者さんの「食べたい」という思いを支えるケアをテーマとしました。ホスピスの看護師さんや栄養士さんに直接お話をうかがうなかで、「食べる」ということひとつをとっても、「生きるために不可欠なもの」、「家族との

団らんの時間」、「思い出の味」など、さまざまな意味があるとあらためて知りました。仕事への向きあい方にも共感できる部分が多くありました。

看護の仕事に 同じ日は一日たりともない

卒業後は、京大医学部附属病院の耳鼻咽喉科・頭頸部外科に入職。疾患や治療の影響で起こる、「聞こえない・話せない・食べられない」などの機能障害をもつ患者さんに対する看護を実践しています。

いまは約7名の入院患者さんを担当し、毎日の健康測定や処置、手術の準備などに日々奔走しています。将来、嚥下障害や、手術によって口から食べることができないなど、食事に困難を抱える方の「食べたい」という思いを支えられるよう、まずは一人前の看護師になれるように勉強を重ねています。

すべきことが多いゆえに、ともすれば作業をこなすような感覚に陥りがちです。で



双子の姉(右)も京都大学法学部の出身です。受験時は勉強の進捗を確認しあったり、問題を出しあったり協力して受験勉強を乗り切りました

も、それでは患者さんの抱える困難を見逃してしまう。医療の提供は、担当医や栄養士、薬剤師などと連携してこそですが、患者さんとふれあう機会の多い看護師だからこそ気がつけることはたくさんあると、先輩方の姿を見て感じます。「作業」にならないよう、毎日なにか一つ、患者さんに新しい話題を投げかけるのが私のルールです。

どんな過程を歩んでいたとしても、かならず看護師の道に辿り着いただろうと感じるほどに、この仕事は私の思いや志向に沿うものです。好きなことをつきつめる人を応援する、そんな京大の環境にも後押しされました。迷うとき、しんどいとき、「好き」という思いは力になります。京大であなただけの「好き」をつきつめてください。

column 休日の過ごし方

休日は予定を詰め込み、外に出ることがリフレッシュになるタイプ。写真は病院近くのワインバルで食べたムール貝。おいしいお店をいつも探しています(笑)。最近沖縄まで一人旅をしたのがいい経験でした。



医療とビジネスとの架け橋に。 前例のない私だから起こせる新たな風

佐々木亜沙美さん

伊藤忠商事株式会社（取材当時）

大阪府 大阪府立北野高等学校 出身
医学部人間健康科学科 卒業、医学研究科人間健康科学系専攻 修了



肉眼では見られないほど小さいにもかかわらず、体内のたった一個が変化するだけで疾患の引き金となる。そんな細胞の不思議に惹かれました。学問として探究したい、そして将来は、悪性の細胞を検査で発見し、診断・治療につなぐ「細胞診断士」になりたい。その両方を叶えられる場所として、京都大学を選びました。

体操部に所属していた高校時代は、練習漬けの日々でした。勉強が追いつかず、1年後に再受験することに。受験までの限られた時間を有効活用すべく、「同じ間違いはしない!」を目標に、自分の思考の癖や間違えた理由を根本から分析して、勉強にいかしたのが合格の秘訣でした。

予想外・予定外の進路への方向転換

大学時代はとにかくすべてに全力投球。怪我の影響もあり、体操をつづける気はなかったのですが、「部員を集めて団体戦に出たい」という先輩に懇願されて2年生で入部。

またもや練習漬けの日々となりました。2年生から参加した大学院のゼミ活動や、3年生からの資格取得のための病院実習など、時間をやりくりしながらの忙しい毎日でしたが、そのぶん濃い思い出でいっぱいです。

研究に打ち込むうちに、細胞診断だけでなく、治療にも関心が芽生えて大学院に進みました。研究は楽しく、迷いなく博士課程への準備をしていましたが、友人から「いちど社会を見てみなよ」の一言。助言はすなおに受けとる性格なので、その言葉に納得し、どうせなら想像すらつかない正反対の世界を覗いてみよう、と、伊藤忠商事のインターンに応募しました。

そこで驚いたのは、ビジネス界のダイナミックな動き。一つのテーマを深掘りするア



体操をはじめたのは幼稚園のころ。大学時代は年に一度開催される、全国七大学総合体育大会を目標に練習に励んだ



部活を引退し、とことん研究に打ち込んだ大学院時代。がん細胞の培養中

カデミアの研究とは違い、商社では医療というテーマにあらゆる方法で働きかけます。治療、予防、創薬などの目的も、投資、協業、新規事業などの手段も、どんなアプローチをしてもいい。ぎりぎりまで進路を迷いましたが、新しい世界を前にワクワクする気持ちに賭けてみよう、と、就職へと舵を切りました。

未来を広げるには、 多様な価値観にふれること

入社して2年、いまは医療・ヘルスケア分野を扱う部署で営業を担当しています。新規の協業先や投資候補先にサービスや事業を提案・交渉して、ビジネスにつなぎます。

医学系の院卒女性の採用は前例になかったと内定が出てから知りました。このユニークな経歴はいまでは強みです。営業先には大学や病院も多く、研究の話でもりあがるこ

ともしばしば。そんな私だからこそ、新しい風を起こせると感じています。

働くなかで実感したのは、ビジネスの世界と医療の世界とはまったく違う考え方で動いていること。それぞれを尊重しつつ、医療にビジネスの視点、ビジネスには医療現場の視点が加わればもっと発展できるはず。両者をつなぐ架け橋として、力を発揮することがいまの目標です。

研究一直線だった私が思いもよらない道を選べたのは、京大で多様な価値観と出会ったから。選択肢は自分の想像の範囲からしか生まれません。たくさんの経験をして視野を広げれば、未来はどんどん広がります。まずは、自分の興味を磨きに磨くこと。そのなかで出会った人や出来ごとが新しい世界を見せてくれるはずです。

column 休日の過ごし方



地元である大阪府箕面市の山。忙しくても毎月一度は地元に帰省し、自然にふれる息抜きをしています。

地元の海風に吹かれて、紡ぐ音。 創作意欲をささえるのは京都での日々

佐々木恵梨さん

シンガーソングライター

福岡県 福岡県立東筑高等学校 出身
総合人間学部 卒業



2015年、アニメ『プラスティック・メモリーズ』のオープニング主題歌「Ring of Fortune」で歌手としてCDデビュー。2018年に『ゆるキャン△』エンディングテーマ「ふゆびより」を手がけ、以降『ゆるキャン△ Season2』、映画『ゆるキャン△』でもエンディングテーマを担当。2024年2月に3枚めのアルバム『Comma』を発売。

バイオリンを3歳で習いはじめてから、音楽はずっと私のそばにありました。これほど夢中になったものはほかにありません。その熱意がぐっと深まったのは中学のころ、アメリカのロックやポップスとの出会いでした。バイオリンやピアノを楽譜の指示どおり演奏することに、当時はすこしの堅苦しさを感じていたのですが、楽譜には落としこめないロックの表現に、「音楽はこんなに自由なんだ」と衝撃を受けました。

どっぷりと音楽漬けの大学生活

高校は進学校で、朝から夕方まで、さらには夏季休暇も勉強漬け。心身ともに窮屈で体調を崩したことも。息抜きは春の文化祭。校則の厳しい高校でしたが、この日だけはバンド演奏が許されていたんです。人前ではじめて歌ったのはこのときでした。「なにを研究してもいい学部」という評判を聞いて、「それなら音楽もできそう」と総合人間学部に進学しました。勉強漬けの高校時



大学時代、サークル仲間と組んだポストロックバンドでは、音源制作をしながら、学内外でライブ活動に励んだ

代の反動で、音楽一辺倒に(笑)。軽音サークルに入ってバンドを組んだり、ライブハウスでアルバイトをしたり、四六時中音楽にふれる時間を過ごしました。

作詞・作曲にはじめて挑戦したのも大学時代です。所属サークルでは年に1回、所属バンドのオリジナル曲だけを集めたアルバムを制作します。私も仲間に加わろうと、鼻歌でメロディーをつくって見たのです。オリジナル曲を引っさげて、複雑な構成やリズムを駆使するポストロック系のバンドを組んで、活動しました。パソコンで音楽制作をはじめたのもこの時期。当時のバンドメンバーとは、いまま共同で作編曲をする仲です。ふり返るといまの私につながるたいせつな時間でした。

生み出した音がだれかに届くよろこび

そのうちにあつというまに就職活動の時期に。社会に飛び込むイメージができずに悩むなかで、好きなことに的をしぼって挑戦

してみようと、1年間休学して音楽を仕事にする道を探りました。レコード会社に音源を送ったり、曲を作ってコンペに挑戦したり。「Pausing」は、そんな迷いと焦りの真っ只中で書いた曲。歌詞や曲から暗い印象を受けるとはいますが、将来が不安だった、当時の心境そのものなんです。

さいわいにも縁がつながって音楽事務所に所属が決まり、卒業後に上京。歌手、作詞・作曲家の道を歩みはじめました。2018年、TVアニメ「ゆるキャン△」のエンディングテーマへの起用をきっかけに、より多くの方に楽曲を聴いていただく機会に恵まれ、感想をいただくことも増えました。楽曲が私から遠く離れて、だれかの心に響いているのは不思議でうれしい体験です。

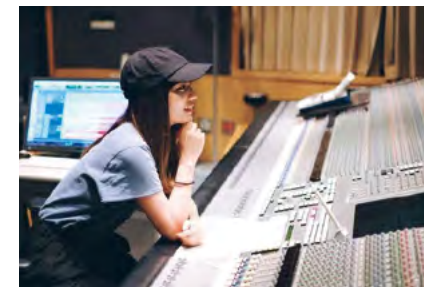
音楽を仕事にする醍醐味を感じるいっぽうで、好きだからこそ譲れない音楽へのこだわりと、求められる音楽とのジレンマに頭を悩ますことも。心がけているのは自分に嘘



曲にバイオリンの音が必要なときには、自身でバイオリンを弾くことも

をつかないこと。自分らしい活動ベースを模索できたらと、2021年に拠点を地元の福岡に移し、フリーランスとして活動をはじめました。都市のせわしなさから離れて、時間の流れを感じて暮らす、そのリズムでこそ生まれる音楽があると実感して、いまは新たな表現に燃えています。

出身高校は「進学が当たり前」の環境でした。進学に後悔はないのですが、進学以外の道もほんとうはあったんだろうと思うことがあるんです。他者に示された道であっても、選択の責任は自分にふりかかる。だったら自分の思う選択をするべき。あなたの心をたいせつにしてください。



スタジオワーク中の一幕

column おすすめの一曲

「BRITISH ROBOT」という曲の歌詞には、「ゲノム」や「ポストク」などの言葉を登場させています。京大出身だからできた曲かもしれません。作曲には、京大時代の友人も参加しています。

密着！

京大生—4回生編

長いようで短い大学の4年間。
春から新しい一步をふみだす4回生が
京都大学で過ごした時間をふり返りました。

case.1 法学部

杉山桜子さん 4回生

宮城県仙台二華高等学校 出身

大学入学 まで

興味と好奇心に素直に！ 大学入学はチャンス！

小学校の隣が裁判所で、授業で裁判を傍聴する機会もあって法律が身近でした。法学部への進学は早くから決めていましたが、東日本出身だからこそ、「西日本の文化を知りたい！」と、知人の少ない京都に飛び込みました。日本史が好きだったことも、「京都で暮らしたい！」という思いを後押ししました。



● 高校生へのメッセージ ●

卒業後の将来を考えることも大切だけど、まずは「いま」の興味に正直になってみて。自分自身と向きあって、自分で選択するという経験こそ重要です。あとから興味や関心が変わってもいいんです。京大への思いがあるなら挑戦してほしい。受験勉強の過程で経験する、自分の限界を更新する感覚は人生の糧になるはずですよ。

大学 生活

コロナ禍の反動で挑戦した ポップアップ・ショップ

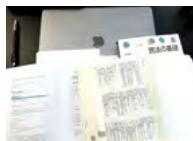
1回生はコロナ禍の真っ只中で、思い描いていたような活動ができませんでした。そのぶん、2回生からは積極的に人とつながりたくて、学生団体を発足して、学生の防災意識を高める活動を始めました。力を注いだのは、阪神梅田本店で開催した「大切な人に想いをおくるPOPUP SHOP」。「自分のため」の防災グッズは後回しにしがちでも、「大切な人へのプレゼント」としてなら手に取ってもらえるのではないかな。それが防災を意識するきっかけになってほしい。そんな思いで、百貨店や企業とやりとりを重ねて実現にこぎつけました。



左／阪神梅田本店で開催したポップアップストアの前日準備にて、メンバーとの集合写真
右／学生団体のメンバーで会議中

法学部の授業、ここがおもしろい！

印象的だったのは「刑法」の授業。大学に入るまで、殺人罪で懲役〇年といったニュースを見るたびに、「一人の命を奪ったのになんでそんなに軽い刑なんだろう？」と思っていました。しかし授業をとおして、私の考えていた刑罰の目的が罪に対する報復であること（応報刑）、そして刑法はそれに留まらず、ふたたび罪を犯すことのないよう教育する（教育刑）といったさまざまな目的があることを学びました。この授業での学びが、私たちが暮らす日常を深く理解するための大きな一助になっていると感じています。



法学部生の必需品『六法』。ノートはノートパソコンでとることも

就職 活動

「絶対にこの業界」はなかった。 だからこそ幅広くていいに

春から行政を対象にしたシンクタンクで働きます。シンクタンクは政府などを相手に、政策課題を調査したり、分析して提言する研究機関。ビジネスとして利益を追い求めながらも、公益に関わる仕事内容に惹かれました。でも、就職活動をはじめたときは志望業界を絞らずに挑みました。多様な業界・企業と出会い考えをアップデート。時間をかけて吟味する過程で、法律や社会の善、福祉への興味を再確認したんです。

case.2 農学部

若園倅子さん 4回生

兵庫県立加古川東高等学校（理数科） 出身

大学入学 まで

そのときいちばんの興味を、 心惹かれる大学で学びたい

高校では「生物」を選択したので、進学先として選べる学部はおのずと工学部ではなく理学部か農学部。環境問題には関心があったのですが、「森林科学科」という学科名を聞いて、当時、世界各地で頻発していた森林火災のことが頭に浮かんだんです。想いがぐっと強まり、農学部に照準を定めました。京大が高校生に向けて開く科学講座「ELCAS」に参加して、京大と京都の街の雰囲気惹かれたのも、大きな理由です。

大学 生活

サークルに卒論、 思うぞんぶん熱中し、充実した4年間

小4ではじめてドラムをつづけたくて、軽音サークルに入部。コロナ禍の影響で思うように活動ができず、もどかしい思いをしました。11月祭での演奏が目標でしたが、1～3回生ではそれが叶わず。さまざまな制限が解除となった4回生でようやく、大好きなメンバーと夢の舞台に立つことが叶いました。サークル活動をやりきったいま、集中するのは卒論。研究テーマはフジバカマです。研究を深めるには多分野の知恵が必要。他分野の教員や他学部の図書館を訪ねては情報に出会う日々。4年めにして、京大が蓄積してきた学術情報の膨大さを実感しています（笑）。

就職 活動

農学部は大学院に進む人が ほとんどだけど……

自分の思いに向きあって、私の歩む道は研究ではなさそうだと思いました。4年間で気がついたのが、環境問題の解決には「ひとりの力では立ち向かえない」という現実。法律や政策など、社会を巻き込むことの重要性を学び、就職を決めました。就職先は、環境問題とも関連するエネルギー業界です。配属が決まるまで、ドキドキの毎日です（笑）。



● 高校生へのメッセージ ●

高3の冬の模試まで、京大の合格可能性はE判定でした。ですから、受験は最後までわからない。あきらめず、思いきって挑戦してほしい。進路選びには、「いま」なにに興味があるのか、それは4年間飽きずにできそうか、楽しそうかの視点がだいじです。私が卒論で感じたように、京大の学問領域は幅広い。入学後は意外と、決めた分野以外のことも学べるんです。



左／2023年の11月祭で、大好きなチャットモンチーの楽曲を演奏
上／祇園白川で着物を着て花見

農学部の授業、ここがおもしろい！

森林科学科は屋外での実習や調査が多く、週に1～2回、実習がありました。「緑地計画論」の授業では、下鴨神社や京都御苑などを訪ねました。京都の地の利をいかした京都ならではの授業。学術的な視点から語られる庭園や鎮守の森の説明はとても新鮮なものでした。



左／授業で訪ねた京都大学芦生研究林 上／山歩き用の衣服はフィールド系実習の必需品

進路選択は
興味に正直に
なるといい！

同感！「いま」を
重視することは
だいじ！



わたしの味方、 わたしの見方

立ち止まったとき、
いつか読んだ・観た作品に
ふと背中を押されることがあります。
今号に登場いただいた方がたに、
高校生のみなさんに
手に取ってほしい作品をうかがいました。



佐々木恵梨さん

佐々木亜沙美さん



『人生に行き詰まった僕は、 喫茶店で答えを見つけた』

赤澤 智 著(祥伝社)

本当にやりたいことはなんだろう、この選択でいいのだろうか、どう人生を歩むべきか悩んでいる人に手にとっていただきたい一冊です。喫茶店のマスターが、脱サラリーマンと女子大学生に夢のかなえ方を伝授する実話に基づく小説仕立てのビジネス本で、読者も喫茶店で座って聞いているかのように気楽に読み進められます。年齢や置かれている状況によって感じ方が変わり、私は大学生でこの本に出合ってから、人生の選択に悩んだときにはなんども手にとっています。

清水真希さん



『わすれられないおくりもの』 スーザン・バーレイ 作・絵、小川仁央 訳(評論社)

人との思い出や人からなにか教えてもらった経験は、その人がいなくなったあとも周りの人の心の中にずっと残りつづけていくものであること、そして、そのけて目には見えないものの大切さを、幼い私に教えてくれた絵本です。この本はわたしの看護観の礎になっている本でもあり、コロナ禍など条件があるなかでも、入院患者さんが大切な人と貴重な時間を過ごせるように努力することの必要性を感じます。そして私自身も、入院中に患者さんと関わるひとりの人間として、一つひとつの言葉を大切にしていかなければならないと、この本を読み返すたびに思われます。

『ちっちゃいおっちゃん ——笑って学べる心のおべんきょう』

尾崎里美 著
(カナリア書房)

人生をあきらめた青年が、自分の心に住む「ちっちゃいおっちゃん」と出会い夢と使命に気づく物語です。潜在意識や心のことがわかりやすく書かれていて、大学生のころに読んでとてもいい衝撃を受けました。いまでこそよく耳にする「自分を愛する」という考え方が浸透する前、そうした考え方とはじめて出会った本です。いま読んでもうすてきな本。すべての人におすすめです。



時任美乃理先生



『納豆の起源』

横山 智 著
(NHK出版)

東南アジアからヒマラヤまでをフィールドワークし、納豆の起源に迫る本です。「納豆のある場所はすべてフィールド」だという著者の、研究が楽しくて仕方ない！という気持ちがこの本の随所から伝わってきます。こんな研究テーマに出逢いたいと思わされた一冊です。

『旅をする木』

星野道夫 著
(文藝春秋)

アラスカに暮らし、大自然に生きる動物を撮影してきた写真家のエッセイです。自然の厳しさや、現地への思い、五感を感じる文章に魅せられました。「環境を守ろう」とはいわずとも、その語り口で自然の偉大さを伝えてくれます。研究仲間にもこのエッセイが好きな人が多く、話が盛り上がることも多いです。



『修復の鑑』

アレッサンドロ・コンティ 著、岡田温司ほか 訳
(ありな書房)

西洋の保存修復の歴史と展開の様相を、豊富な修復例を手がかりに読み解く一冊。「作者の意図」や「オリジナリティ」をめぐる問題が、美学、社会学、政治学、哲学などの他領域と綿密に交差する過程が鮮やかに示されています。科学的な実証主義への過度な信頼に警告を発しながら、既存の修復方法につねに批判的なまなざしをもって対峙する作者の態度には、背筋がのびるものがあります。



田口かおり先生

『神様のカルテ』シリーズ

夏川草介 著
(小学館)

忙しい医療現場で働くお医者さんと、その妻や友人との関わりを描いたお話です。患者さんの命と向きあう重みのある内容もあるのですが、読み口は重くなく、むしろ登場人物たちのおもしろい日常に笑えて、読んだあとはほっこりするような本です。仕事や日常で生きていくなかで、自分が大事にしたいものはなにかを考えさせられる深いストーリーと、軽やかで温かい読み心地がとても素敵で、シリーズをとって大好きな本です。



仲ゆかり先生

